■ 2026年度 入試問題分析シート ■

一橋大学 **前期日程**

科目	国語

試験時間	100 分	満点(配点)	法 120 点、経済・商 110 点、社会 180 点 ソーシャル・データサイエンス 100 点	出題数	現代文2題、 近代文語文1題

総 括

難易度(昨年比)	難化	**昨年並**	易化
分 量(昨年比)	増加	**昨年並**	減少

〈総 論〉

問題文の字数は、問題一は昨年並み、問題二で増加、問題三で減少しており、全体としては昨年度と同程度の分量だと言える。設問数や記述設問の字数には大きな変化は見られなかった。問題一は、文章そのものは読み取りにくいものではなかったが、設問の解答字数が短く解答の焦点も絞りにくい設問が見られ、読解力・記述力が厳しく試されたと言える。問題二は、昨年度に引き続き今年度も近代文語文からの出題となった。過去二年出題されていた現代語訳の設問は今年度は見られなかった。問題三は、内容は明快でわかりやすいものであったが、字数内で文章をまとめるためには記述内容の大胆な取捨選択や表現の工夫を行わなければならず、必ずしも簡単なものではなかった。

〈合格への学習対策〉

問題一については、現代の評論を中心としながらも、様々なタイプの評論や随筆に触れ、簡潔に解答をまとめる練習を積んでおきたい。問題二については、今年度は近代文語文が出題されたが、近世古文や現古融合文の出題の可能性も否定できないため、どのような文章が出題されても対応できるように準備しておく必要がある。問題三に関しては、普段の現代文学習に２００字の要約練習を組み込み、信頼できる添削者に助言を仰ぐようにしたい。

問題分析(本文)

問題番号	類別(ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
問題一	評論	西田正規『人類史のなかの定住革命』(講談社 2007 年)の一節。	人類の生存状況の変化に伴う言語の発生と変容について論じた文章。	標準
問題二	評論	福沢諭吉「人の説を咎む可らざるの論」(『民間雑誌』慶應義塾出版社 1874 年)の一節。	人々の考えを世潮に合わせて一様化することを批判した文章。	標準
問題三	評論	佐藤裕『ルールの科学』(青弓社 2023 年)の一節。	ペナルティの設定が必ずしもルールを守ることにつながらないことを論じた文章。	標準

©駿台予備学校

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

設問分析

問題番号	設問番号	設問形式	設問内容（特徴・解答上のポイントなど）	設問のレベル
問題一	問い一	漢字書き取り	全体として標準的な出題。	標準
	問い二	記述	第二段落から傍線部までの論旨をとらえる。温帯における狩猟を行うために多くの人間を組織化する必要があったという点をおさえる。	標準
	問い三	記述	第十二・十三段落の趣旨をとらえる。類人猿の知的能力や表現能力に可塑性をもった社会を統合・維持する役割があることを読み取る。	標準
	問い四	記述	「仕事をする言語」との対比を意識しながら、本文冒頭で語られている「安全保障の言語」についてとらえる。	やや難
問題二	問い一	記述	傍線部直後の記述をとらえ、比喩表現としての「奴雁」の意味を読み取る。	標準
	問い二	記述	傍線部直前の説明に目を向ける。批判がかえってその説に人々の関心をひきつけてしまう所以を説明する。	やや難
	問い三	記述	本文末尾で語られている内容をとらえる。多様な意見を表面的に統一しても人の内心は変えられず、むしろ世に虚偽が広まるという理屈を読み取る。	やや難
問題三	問い	記述（要約）	常識的な考え方に反し、ペナルティによってルールを守らせることはできないと主張する筆者の論旨をまとめる。	標準

「問題レベル」は，本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に，問題の難易度を５段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので，総括の難易度（昨年比）とは連動しません。

©駿台予備学校